



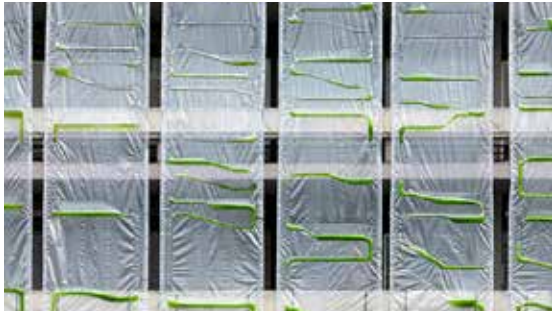
未来をつくる ソーシャルイノベーション 第2部

文・西村勇哉

暮らしの中から見つける変化の力

CASE:

52 公園—都市の中で自然を再現する—



『ecoLogicStudio』が開発したバイオカーテン。既存の建物にも掛けるだけで都市の中に自然を持ち込むことを可能にしている。
©ecoLogicStudio (<http://www.ecologicstudio.com>)

POINT!

都市における自然の再現は植物学と造園技術によって始まり、テクノロジーの進化とともに、より密な都市と自然の融合が進展している。



1759年に宮殿併設の庭園として始まった『キューガーデン(キュー王立植物園)』は、現在では研究施設として運営されているほか、種子銀行としてのミレニアムシードプロジェクトにも取り組む。

Photo by DAVID ILIFF License: CC BY-SA 3.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0>)

今回は、「自然の再現」について、公園を起点とした取り組みと歴史について見ていきます。

広場が古代ギリシアの時代から造られてきたのに対し、緑地を持つ公園の歴史は浅く、1840年にイギリス中部の人口3万人の町「ダービー」に、実業家で慈善家でもあったジョゼフ・ストラットによって造られたものが最初の公共公園といわれています。

ダービーの公園設立に先立って、1833年にイギリスの「公共遊歩道委員会」の調査報告書では、都市化の進行に伴う人口増と都市環境の悪化を背景に、住民の慰安と運動のための空間の必要性が挙げられていました。

ダービーの公園は、植物学者で造園家のJ・C・ラウドンによって設計されています。ラウドンは、設計にあたって、教育と散策という2つの目的を挙げ、教育の観点では800本の樹木すべてに植物学上の分類と原産国、特徴が書かれたラベルが貼られました。植物学者のラウドンによって設計された公園が基盤となって、現在の公園にも見られる、ラベルの貼られた樹木が公園に登場します。

その後、世界中に広がった公園は、日本では1885年の東京市区改正審査会で、「人口稠密ノ都府ニ園林及空地ヲ要スルハ其因由一ナラズト雖モ云云」と審議されたことに始まり、1956年には都市公園法が施行され、都

市部では住民1人あたり5平方メートルの公園の設置が基準として定められるようになりました。

そして、現在では、より生活に密着した都市の中の自然の再現が試みられ始めています。2018年には、『三菱電機』が青空の仕組みであるレイリ―散乱を再現した青空を映し出す天窓を発表しました。この天窓は、青空だけでなく朝焼けや夕焼けなども調光によって再現することができます。ロンドンのデザイン事務所『ecoLogic Studio』が開発したバイオカーテンは、微細藻類を用いることで太陽光によって光合成を促しながら汚れた空気を浄化する、ビルの壁面などに掛けることができる製品です。

都市の内部に人工的な自然の再現を行い、都市環境を改善する取り組みは、公園に始まり、現在ではさまざまなテクノロジーによってより都市の内部に入り始めています。自然を再現する技術は、形を変えながら都市と自然の融合を少しずつ進めています。



にしむら・ゆうや ●NPO法人ミラツク代表理事。
大阪大学大学院にて人間科学の修士を取得。人材育成企業、財団法人日本生産性本部を経て、2008年より開始したダイアログBARの活動を前身に2011年にNPO法人ミラツクを設立。Emerging Future, we already have(すでに在る未来の可能性を実現する)をテーマに、全国横断型のセクターを超えたソーシャルイノベーションプラットフォームの構築と未来潮流に基づいた新規事業創出のためのプロジェクト運営に取り組む。
<http://emerging-future.org>